

の

別

No.

二存し、郷國より餘りなく残つてみる。私が長い間
 此人の画に接するところ此のハ此考めがある。信州
 も多く此人の作者を散らわつておる。多くの人
 田舎書院の画と軽んじて、東京で持去ること
 もろろたやうに、私に東京で於ては、
 有りなきを見受る。初めは
 此人の画を世に知らしめる。東海銀行主
 菊池惺堂氏にてある。氏に隠んた画
 の作品を特に集めて、その品階月旦して、教
 不幸なる作家の為め、氣を吐いたが、長井
 雲坪も極り出でた一人、私を以て其お蔭で
 七年前初の寫目するを得た。雲坪の関歴

東京市立美術館

2021.11.12
 2021.11.12
 2021.11.12

別 3

この

執事七怪を氏の古い此よを石と初めを知り、其の
日起脱の人格と其の敬意の行動とを云ふ少くも
惹きつけんとす。此の興味を感ずるは、
心とす。私ばかりを多く書き、世界は古影郷音として、
観る者一時其此画家の作るべきに懐か附さん、
埋没した画が、おきり、東京、持
こまんだ。宝塚中連の各が疑々立ち上る、つんて
其の人の経歴の一曲と取調べる人も出たが、
七垂しく書いたよ、私の知る所は、昨年の春
頃、あつたか、村松梅風氏が中央分論を書いたの
が、見いあふ。

私五〇幅所著とみれば、多くの人から贈る
此人の心品を

東京梅風氏

4

たよむ、傑心(此)と云ひ並ぬる程度の、こゝろにある。是
 一七七七、此人の特徴の、充分な現れんとあつた。其の現
 逸の筆致と南畫の、神龍を觸れ、龍を近氣
 のるゝ所を看取すことか出来た。私に常々此
 人の傑心を見たいと心掛たが、其樹を得るゝか
 つた。然るゝ光沢、神龍、歸へり、常在中
 私の友人が此の画家の末才の子息、長井鴻一と
 いふ年の若い人を、律のあつて来た。其の、此頃出版
 せんじ計りの二冊の画集を、推して示さんた。を
 九が、雲峰の画集、事々として、信州の教習、
 若くは、依りて上版さんた。けつ、文四〇、珠翁
 さん、このが七八分を占めてゐた。にん、木依、
 推して来た。

Handwritten text on the reverse side of the page, appearing as bleed-through from the other side of the paper.

の画が

精心もあつた大心もあつた

No.

5

多く収めてゐる。山の人物花卉各方面に端り、
書幅も若干あり。複製表も多し。此人の画を斯く
多く見ることはいんが。●遊めて、其の言は●作心の大
観とてあつた。此の内、少くも傑作心もあつた。少
くも氣勢も、於て、**南畫家**の首
位に置くとへき。●思ふ。有体云々
自分が思つてゐる以上、**腕**を有する事
であることを感した。●流石と支那と●修業せし
む。●日本画家の角あり難い。倭具
といふものがあつた。●其の筆致もあつた。●其の
事したから、●其の筆致もあつた。●其の
といふものがあつた。●其の筆致もあつた。●其の

關係

最初

（ハセ）

つて

ハセ

このあつた動生が

Handwritten text on a separate sheet of paper, partially visible on the right side of the page.

別

奇数え、清貧、不遇、るゝが経緯をさし、其味のあ
るゝのである。併し、郷土、●、雲、塔の親族と親戚も
親しく交へて居る。可なり誤り、如、傳、ハ、つ、お、さ、や
う、と、あ、る、多、誤、り、も、不、然、却、つ、て、折、中、面、白
味の、ある、往、歴、も、無、味、味、日、す、る、氣、味、も、な
い、む、ら、い、が、事、実、の、事、実、と、し、て、傳、へ、後、心、な
ら、ぬ、と、思、ふ。

8

No. 下子

今ま、び、●、雲、塔の傳、と、し、て、考、へ、ん、と、あ、る、こ、の、を、極
め、て、其、流、不、く、叙、し、て、見、る、と、
雲、坪、ハ、新、旧、二、隣、の、混、雜、の、分、り、家、三、生、ん、其、家
ハ、正、當、も、心、の、也、業、と、し、た、雲、塔、ハ、天、性、画
を、好、ん、で、遠、く、長、崎、の、二、師、を、求、め、ん、と、し、た。

東京 明治 33 年

9775-1

同日村々其志の夫は安かありて、其志を憐れ
 み、えん或作の詠費を興く、且つ日蓮四社行
 の服書を白林末を給し、旅中の便に
 目録つてやつた。雲峰は此奴志の長崎の
 口送りつき、初め鐵筋の之の以後、送雲に
 人が、送雲の役を交りて雲峰の雅節と
 興あると其に自刻の印を興く、送雲は
 直江戸へ上る時、彼人の僕を、従者として隨
 ふべきにあつた。然るに折の病んでおいて、
 叶はさうらた。然るに送雲は江戸から長崎
 へゆくる途中、船が覆つて没して、
 従者の一門人と、魚腹に葬られた。従人の

共上

ん

手紙の文、
 雲峰の雅節と
 興あると其に
 自刻の印を興く
 送雲は直江戸へ
 上る時、彼人の
 僕を、従者として
 隨ふべきにあつた

此の不幸も勝つて涙ぐ悲しむ自分か師
 随伴しつゝ死すべきであつた自分か
 幸を免かぬ此の偶例である。信物か
 二殉すことを忘るゝはと云ふは心し
 此の彼んの後支那に流るゝ様を得て。口舌の後
 甚多断る差々進んぬ。帰朝の後、同着
 しく支那に遊んぬ。海防山、東京の時めい
 心か、彼ん、郷國も物なき信物か。口舌
 ふんも或る時、戸隠山に隠んたりして。此等
 又法食の境に在つた。彼ん、或る旅食に重患
 罹り深切の着渡を多けん世中を納りて終
 事と一た。或る時、
 志山、信物を通る

決し

全く

保し

か

志山

信物を通る

1771
 此の不幸も勝つて涙ぐ悲しむ自分か師
 随伴しつゝ死すべきであつた自分か
 幸を免かぬ此の偶例である。信物か
 二殉すことを忘るゝはと云ふは心し
 此の彼んの後支那に流るゝ様を得て。口舌の後
 甚多断る差々進んぬ。帰朝の後、同着
 しく支那に遊んぬ。海防山、東京の時めい
 心か、彼ん、郷國も物なき信物か。口舌
 ふんも或る時、戸隠山に隠んたりして。此等
 又法食の境に在つた。彼ん、或る旅食に重患
 罹り深切の着渡を多けん世中を納りて終
 事と一た。或る時、
 志山、信物を通る

の折北の善友を能く訪ねて見ると、
 分る生流は長らく、
 一封信を贈つたのを、
 雨にが、
 意く来て、
 色を損し、
 無理やり、
 へ、
 け、
 一、
 重忠、
 戴いて之んを、
 持ると

とい
 と思ひ

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

を一切の排し師を殉す微忱を表しこれ云ひ
し中又是の葬式の日蓮宗の礼を
以てまじしと遺命を以てのり用事
を渡世の恩恵を忘るるに為めたと云ん
る。雪塚は旅を得た妻を棄つて後妻
を迎へた。妻は少子かき、後妻はハ子が四人
あつた。

以上が雪塚の履歴を七世に現れてゐる大略である。
この伝を見ても雪塚の風格は時流を抜いて
ゐる。徒らな名を著すことのみを以てし、
恩人に對しては信誼の厚かつたことでも
満ちたる軽薄文人といつゝおのづから其(其)を美

Handwritten text on the adjacent page, mostly illegible due to fading and bleed-through.

別 達

もしもぬる人として親類のい
て偶れひるい。再時同く支那は修業し今
た友人の老山が一匹の時めきさるる。今に却
つて願又いんず。埋没の心品が珠とせ
らるる。さるるの七怪いあるは思ふ。

以上略儀の内いだけけが事實いんだけけが誤を
あるか。自合の未だ十分補査の暇や多いか。蓋し
大体の事定まらぬと思ふ。但れ雪坪の
家。就てい漏んてあることが少くさるる。亦
誤つてあることもある。自合の今お訪べれのと重々
より方面にあるの如前に掲げれ雪坪の一族を
井鴻一氏から得た材料である。

雲保の俗稱は長井元次郎で、父の花は甚六と云ふ。母の花は右衛門の女であるが、父の家は城後北蒲原郡太子堂の石井兵左衛門といふ可成りの家であつた。雲保は二人の弟があり、次男は廣五郎末男、末男は中

廣五郎は北海道に土木の業を成し、其の今七五郎は西洋家具屋を営み、斯業界の魁と稱せられてゐる。此人の姓が長井といふは長と云ふと云ふのである。此の稱の誤りか、廣五郎の屋敷が角長び、其の南標が四角の角のトした其の中、長と云ふ字を書いた

...

所から、戸籍吏が見誤つて長男と
 此のが本姓はヤハリ也井である。此の
 道、籍を移したのが、流十三四年の頃、其際
 書き誤まつたのが、其の故である。
 改めず、^{（判）}戸籍と申す。んがある。
 雷坪の父の死後、家督を相続し、
 雷坪の雅静を正名として、戸籍に記
 せん。雷坪の先妻あり、子が無つた。末
 大を養嗣あり、家を嗣せられた。其の
 雷坪の後妻あり、四人の子があらば、其の
 を末大の養子とす。四人の子、今も健
 在である。

東京府三浦郡

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '戸籍' and '雷坪'.)

雲坪の家は醫術を業とした。雲坪も亦ゆゑに流子
 せしめ此のち醫術業を修めしめんとして此のむ
 ありが、雲坪の志は醫術ありまうして西に在
 つた。彼んかの長崎行ハ十五早年の時ハ一
 家の田舎を得て出かけた。脱走せしむるの
 つた。旅費の家から送さんぬし不自由のあつ
 た譯ハいさゝか。或る忠告が其つた。此の錢
 別ハ日蓮宗田舎の白衣を貰つた譯ハ
 途中行者の姿で行けばお金であると思
 遠が心付いての厚子と思ふた。先浪ハ十五
 早年の少年の長旅を心配したよと見
 へる。

雲坪の家は醫術を業とした。雲坪も亦ゆゑに流子
 せしめ此のち醫術業を修めしめんとして此のむ
 ありが、雲坪の志は醫術ありまうして西に在
 つた。彼んかの長崎行ハ十五早年の時ハ一
 家の田舎を得て出かけた。脱走せしむるの
 つた。旅費の家から送さんぬし不自由のあつ
 た譯ハいさゝか。或る忠告が其つた。此の錢
 別ハ日蓮宗田舎の白衣を貰つた譯ハ
 途中行者の姿で行けばお金であると思
 遠が心付いての厚子と思ふた。先浪ハ十五
 早年の少年の長旅を心配したよと見
 へる。

17 下下 一

別

長崎の雪村の身を寄るに医家ハ二軒あり。其内の一は液造り持が難を執業といふ。他の一軒の花の形ありあるが此の液造りハ清玄(山本山の宗)拜家也。其家より山本山の仙岳が多く花をえんてありつたといふ。

別

雪村ハ医家ニ折せんといふ。其の志こゝろありしと画又ありし所ハ後述を以て終ニ共鳴して自から鐵画又紙画ハ概々ありし。乃ち雪村ハ二軒の大家ニ師事したるありし。

別

一旦長崎から帰國したる雪村ハ十八か十九の頃ハ本人ハ医学を終めず。外の修業

雪村の修業

雪村の修業... (Faint bleed-through text from the reverse side)

をしつゝの事、^{（此語）}面白からず思ひ近親
の病葉を口實に呼び戻し、本人に異見
をかくるといふの事あるが、彼人の意見と意
— とうふたれ 見入るものがある。

此の頃有る時、父母は既ニ歿シ、末弟も高時母
の實家ニ引取んじおたのむ、重信も大子生
母ニ赴き、~~母~~母方の家ニ宿りたり。而も
泥垂るに従来長井由次郎といふ者があつた
るも、僅うの間滞在し、竹馬の友とある。其の
竹林某と^{（其語）}終に飲み回つたと傳へる。

重信の家は豆腐屋にあり、又傳へる。

19

別

けんよ、まゐり近年の事である
 うの誤りか従来由次郎の家が豆腐屋屋にあ
 つたの事実であるが、~~まゐり~~取寄りの
 と見へる、現在いさゝか事業を廢し、
 が、~~別~~別姓を冒してゐるものか、
 香保の支那へ赴いたのは三十一二歳の頃で、
 三十八九歳の時再び旧郷したことがあるが、
 項違事の中ま記する理由が、
 り、まゐり動機が、
 と云ひてゐる。

別

此の頃の時、
 友十林齋の家の

友十林齋の家の
 友十林齋の家の

Handwritten text on the reverse side of the page, mostly illegible due to fading and bleed-through.

二〇

〇〇

勢

別

おもて里人の長井が、若狭國と繋つて、つて来
 とと一概に思ひこみ、大勢の患者は山をす
 勢は由次守の門前、三年をとり、此の如く、雲峰の
 勢を元と、余皇重良口から逃れ出し、到底郷
 里に帰り難いと信州に入つた。和道、張
 門を極く、
 ツ、
 赤毛の織田門下、其の比、近年時代、一、此、此、
 者した、こと、前、も、言、ひ、た、が、又、陰、母、の、室、家、に
 滞在、中、眼、疾、目、も、羅、り、臥、床、し、て、み、ると、一
 人の、旅、給、ひ、が、わ、つ、て、来、て、織、田、の、川、人、に、
 傳、へ、て、北、河、に、来、た、の、に、一、枚、書、か、せ、て、く
 △ あ、さ、か、い、

東京 明治 高 録

九

詐

九と云ふは、家人の画阿と云えて、無下
 兼、略も七玉来ず、家へ上げて云はる、其
 事と先けるも、云はる、こゝ、呼べと、枕迄
 こ捉き、眼と備帯を施し、起
 き直り、俺、穢阿門下の桂山、其頃ハ
 かく難し、此、穢阿門下の桂山、其頃ハ
 い比、ことか無い、察する所、君の穢阿へ人を
 假稱する、そのむある、苟も画家とある、
 其の名家の名を利用する、と、不埒いあ
 る、速う、立去るべし、と、大鳴し、家人、命を
 遣出さし、の、家人、此、穢阿の、為の、飯
 の用、云、七、と、あ、比、の、ある、が、絵阿、

東京相国寺藏

No. 22

よもや御前門へがれ家へあつてと名付ま
 考へが、一時の方便に御前門人と云ふれ
 じあるか、と見現はえと寸時七はれ
 たまふ、一畝に適け出し、れのを家人
 ハ何故とも初とす、氣の毒と思つてあると、
 雲坪と云ふと、黙しておれ、家人
 を呼んが、あつて男ハオと、遠く行くまの呼
 び度せと云ふ、二三の杜丁が年別を
 追跡を、これ何れ終に、行方分らるる
 つれと、後、才が何故急と、呼び度す
 氣、又、まらたか、と聞いたら、あつて男ハ師の
 名を利用、一年、不埒の奴だ、其の画

東京府立図書館

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 御前門 and 家人)

別

相南は出来ておる。今おし終養を經たハ
御前より一人とゆふに御前も連三派に
画家と云ふものも御前相違なむあらる
まを御前任せと追出されたの、不覚ひあ
つたと云ふ悔へれといふ。

混垂に存ける淨徳寺の雪塚が幼時手
習に過つた縁故があるの、初長崎の
庚つとき此時給馬を描いた額を納
めたことかある。二回目：帰省した時、其
額へどうもつくと云き、見ればつたが終
又見當らうられたの、雪塚の更なる
菊花を畫し七位職と興つた。

相南

Handwritten text on the adjacent page, mostly illegible due to fading and angle.

108

Handwritten text on the adjacent page, mostly illegible due to fading and angle.

別

No. 14
17

所在が知らぬ

今集の失せを任職の残念かり物なり

以上の事定まらば長井鴻一氏から聞き得た所が
ある。こゝにまむ言はの傍として書かんれよと
いふ文遣のしるすか、今が手元は埋書氏の七村松
氏のもも持公のしるすか、対照して見るとこ
との出来事いのを遺域に思ふが少くも
親族の直流があるから材料の精確である
と思ふ。表し村松氏の遺言の補遺と
もする事か出来さうか

私の本意とするの
30